

書 評

猿橋順子 (2021) 『国フェスの社会言語学
—多言語公共空間の談話と相互作用』
【三元社、2,300 円】

末 田 清 子*

本書は、2015 年 9 月から 2018 年 5 月までに代々木公園や日比谷公園および増上寺などで行った「国」フェスのフィールド・ワークと、コロナウィルス感染症拡大後の 2020 年にフォローアップとして行ったフィールド・ワークで得られたデータを社会言語学的視座から分析し、まとめた大作である。国フェスとは、「都市の公園、広場、目抜き通り、商店街、寺社の境内、運動場など、野外の公共空間で、年に一度（多くても二度）、週末や日本の祝祭日に開催される、諸外国の国名や地域名を冠した催事とする。これらの公共空間に、期間限定で、当該国・地域の文化活動が持ち込まれる。そして基本的には入場無料で、期間中、誰でも自由に入退場できるもの」（同書、p.12）である。本書は、それぞれの国や地域の文化活動や文化資源を持ち込んで行われる野外イベントで流通するモノや、コトや、価値などを社会言語学的手法を用いて「国フェスとはどのようなものだろうか？」そして「国フェスでどのようなことが起きているのか？」という問いを探究している。

本書は 9 章から構成されている。まず、第 1 章では、国フェス研究の社会的かつ社会言語学的な意義について論じ、後続の章で取り組む課題とその方法論を明らかにしている。具体的にはマルチモーダル談話分析 (MDA)、言語景観

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

研究、地理記号論を紹介している。第2章は予備調査や選定した国フェス15件の開催経緯、運営主体、開催の目的等その概要を明らかにしている。第3章では、国フェスのチラシに着目し、テキストや、画や、デザインそして使用言語について分析する。第4章では、国フェスの当該国名やその地名がどのように使われているかについて考察している。第5章では、通訳者が配置されていた国フェス（アイルランドの国フェス）で通訳が欠落する場面に着目し、国フェス当該言語と日本語使用について分析している。どの言語を使うか、誰に向かってどのメッセージを発信するかはそこに関与する人々の力関係や国フェスの方向性などを示唆するものとなりうる。第6章では、ベトナムフェスティバル、カンボジアフェスティバル、ミャンマー祭りにおいて、当該国の言語が商品やサービスのように位置づけられている事象に着目している。ブース内では食べ物や民芸品・工芸品を販売するのが定番化しているようだが、〇〇語教室などという形でそのフェスのなかで使えることばやフレーズを教える試みもあるようだ。それを「言語関連活動」と括り、その今後の可能性について論じている。第7章では、メインステージで展開される音楽ライブで楽曲の間に挟まれるトークを談話分析している。事例としては台湾をルーツとして日本で暮らす多言語シンガーが3つの言語（台湾原住民の言語、中国語、日本語）をどのように使い、言語地位の「不均衡」を是正しようとしているかを示唆している。第8章は新型コロナウイルスの感染拡大がどのように国フェスに影響を与え、「新しい日常」におけるオンラインでの国フェスの可能性と課題について確認する。第9章では、第2章から8章までに展開した論点をまとめ、今後の可能性について触れている。

通読すると、本書が実にたくさんの社会言語学的そしてコミュニケーション学的、さらに社会学的な意義を孕み、多くの研究テーマに直結していることがわかる。評者は以下の5点が本書の主な貢献だと考える。まず、「国フェス」という日常的にみかけるイベントに着目したこと自体が大きな貢献だと思われる。民俗学では、日常的な普段の生活や状況を指すことばがケ（褻（け））であるのに対して、あらたまった特別な状態、公的なあるいはめでたい状況を指

すことばがハレ（晴）（波平，2021）である。フェスは日常生活とは違う体験を、代々木公園およびその周辺の場所ですするという意味においては「ハレ」に近い。ちらしの表現や、デザインには特別な機会であることが描かれており、また司会の進行には一定の言葉や言いまわしが決められて採り入れられているようだ。このようなモノがフェスというのが特別な機会であることを浮き彫りにするのだろう。しかし、日常から完全にかけ離れているのかということでもない。なぜなら生業につなげるためにフェスに出店し、ビジネス・チャンスにつなげ自らをエンパワーしようとするエスニック・レストランの存在も本書では描かれているからである。つまり、国フェスが「ケ」と「ハレ」を併せ持った実体であることがわかる。

二点目は、国フェスによって当該国のある特定のイメージがどのように醸成され、また消費され流布される可能性があるのかをMDAによって本書が示唆しているという点である。限られた時間と空間のなかで、国フェス担当者は何らかの方向性で参加者の当該国のイメージ形成に影響を与えるコンテンツを盛り込む。参加者が当該国にどれほど馴染んでいるかにもよるが、限られたコンテンツがとりわけ「初心者」の当該国のイメージ形成に大きな影響を与えるかを本書は示してくれる。そしてそのことは国フェスのみならず、さまざまな文化交流活動のなかでみられるだろう。たとえば、評者自身が留学生として米国で勉強していた頃はJapan nightと称して、日本文化を伝える機会をもったことがあった。着物を着て、書道の道具をもち参加者が文字を書くのを手伝ったりした記憶がよみがえる。随分昔の経験を持ち出してはいるが、今でも同じような場面に学生が遭遇しているのを耳にする。つまり、このような定番の日本を紹介するという場面で、変容する日本の部分は切り捨て、日本＝着物というある種のステレオタイプに自分自身が嵌り“The Japan”を押し出す形になったことは否めない。押し出していない部分を切り捨ててしまうことに違和感を感じながらも、一時の参加者には「分かりやすさ」を優先させざるを得ないことになる。ある意味で、それぞれの国フェスのなかで文化ナショナリズム（吉野、1997）ということばが見え隠れするのであろう。

三点目は、二点目に関わるが、国フェスが移民コミュニティや、当該国にルーツをもつ人たちによって運営されてものもあることから、国フェスとそこに関わる人々のありようは、Berry (1997) やその後続の移民とホスト社会の関係性モデルを彷彿させ、マクロレベルの異文化適応の研究に貢献する可能性を秘めているということである。その後さまざまな変更が後続のモデルにみられるが、Berry のオリジナルのモデルでは次の4つの類型がみられるとされている。移民が自らの文化や人々との関係から離れ、ホスト国の文化やホスト国の人々との人間関係のみを大事にする場合（同化 *assimilation*）、自らの文化や出身国の人々との人間関係のみを大事にし、ホスト国の文化や人々との人間関係に重きをおかない場合（分離 *separation*）、移民が自らの出身国もホスト国との関係も大事にしない場合（周辺化 *marginalization*）、そして両方を大事にする場合（統合 *integration*）である。ホスト国の文化や人々との関係性と、出身国の文化と人間関係の両方を重視した統合の在り方が国フェスに投影されていれば、「理想的」な移民コミュニティの在り方なのかもしれない。あるいは、subjective well-being (Diener, 2009) の研究からすれば、そもそも移民の主観的幸福感とは「適応する」「しない」とは別次元であり、国フェス自体をウェルビーイングの表れと捉えることができるかもしれない。しかし、いずれにせよ国フェスを運営する過程で、移民コミュニティや、ホスト国である日本人、そして参加者の間の相互作用が移民コミュニティや日本社会を変容させうるツールになりうると考えられるだろう。また、国フェスは、基本的にリハーサルはないと本書にもあるが、リハーサルでなくても企画や運営を含めて表舞台（フロント・ステージ）に出ていない裏舞台（バック・ステージ）(Goffman, 1959) を分析することで、国フェス研究は奥行きのあるものとなることが分かる。

四点目は、著者・猿橋氏のフィールド・ワーク力である。フィールド・ワークはとても難しい。日常生活に目配りし、感度の良いアンテナを広く立てておかなければならない。そしてフィールドにすんなりと入っていくことができる謙虚さと諦めない芯の強さと異文化適応能力を持ち合わせなければならない。

同僚である筆者は、いかにルーティンの仕事をこなしながら、代々木公園でのフィールド・ワークを続けてきたことかと、著者の苦勞が人一倍理解できる。さらにフィールド・ワークでは、その場の参加者としての役割と研究者の役割のコンスタントな切り替えが求められる。本書においては、フィールド・ノートをつけ、そしてそれを読み返すための時間をとって離れた場所で内省する著者の姿も描かれていた。フィールドにすんなりと入っていくことができる異文化適応能力とフィールドを諦めない芯の強さは、後続の研究者も学ぶべきであろう。

五点目は、国フェスの運営が公的機関主導型のもの（例：ベトナムフェスティバルや日韓交流おまつり）と、草の根主導型のもの（例：ラオスフェスティバル、コートジボワール日本友好 Day アフリカンフェスティバル）に大別されるようだが、つねにトップダウンの活動とボトムアップの活動がどのように相互作用するかに著者が目を向けている点である。そればかりか、国フェス間が競合したり連携したり、またエスニック・ビジネスや文化芸術活動を活性化させる触媒的存在であることや、当該国本国での祝祭や宗教行事とも結びつく可能性も提示している。そして、国フェスの運営がイベント運営会社によって運営されるようになることもあり、その場合に多様性が重んじられる国フェスが「似通ってくる」矛盾をも著者は見逃していない。このようにマクロな力学がミクロな活動にどのように影響を与えるか、またミクロな活動がマクロレベルの行政にどのように吸い上げられるかは注視する必要がある。

このように、本書が果たした貢献は枚挙にいとまがないが、今後の課題も少なくとも3点ある。まず、読み終えたときに「一体著者は何が一番知りたかったのだろうか？」というのが素朴な疑問であった。おそらく個々のフィールド・ワークのなかで立ち現れてくる設問をまだ消化しきれていないという感触を得た。

二点目は、通訳者の言語切り替えについてである。民族言語的バイタリティ（Bourhis, Shioufi, & Sachdev, 2012）など比較的長期的時間軸で考える言語の強さではなく、本書で出てくる言語の切り替えは瞬時のものであり、即席の

ものでもある。国フェスの主催者そして参加者というのは大枠の役割ではあるが、そのなかで瞬時に個々のアイデンティティの交渉が行われているはずである。それをMDAでさらに解き明かすことを期待したい。

三点目は、国フェスの出身国でのありかたと日本でのありかたがどのように相互作用し、維持あるいは発展するのだろうかという課題である。ここには、コロナ禍を経て、オンラインというツールに移行するのもしないのかを含めてあらたな展開があることを期待したい。以上の3点を踏まえて是非続編を執筆して頂きたいと思う。

引用文献

- Berry, J. W. (1997). Immigration, Acculturation, and Adaptation. *Applied Psychology: An International Review*, 46, 5-34.
- Bourhis, R.Y., Sioufi, R., & Sachdev, I. (2012). Ethnolinguistic interaction and multilingual communication. In H. Giles (Ed.), *The handbook of intergroup communication*, (pp. 100-115). New York: Routledge/Taylor & Francis.
- Diener, E. (2009). *The science of well-being: The collected works of Ed Diener*. doi: 10.1007/978-90-481-2350-6
- Goffman, E. (1959). *The presentation of self in everyday life*. Garden City, NY: Doubleday.
- 波平恵美子 (2021) 世界大百科事典 ハレ (晴れ) <https://japanknowledge-com.hawking1.agulin.aoyama.ac.jp/lib/display/?lid=102006068300> (2021年8月19日).
- 吉野耕作 (1997). 『文化ナショナリズムの社会学——現代日本のアイデンティティの行方』名古屋大学出版会.